

小島克久

「新型コロナ禍の台湾における外国人介護労働者の動向：公表データを用いた分析」(優秀ポスター賞授与)

(小島克久 記)

## 第20回世界社会学会議

国際社会学会 (ISA) が4年に1回開催する世界社会学会議 (ISA World Congress of Sociology) の第20回大会は、2023年6月25日 (日)～7月1日 (土) にかけて、オーストラリア・メルボルンにて開催された。同学会は社会学における最大規模の国際学会であり、4,500名程度の会員が所属している。ISA が主催する大会のなかでも、4年に一度開催される世界社会学会議は、各国の社会学者が一堂に会する学会大会である。

社会学が扱う分野は多岐にわたるため、ISA にはテーマごとに Research Committee (RC) が設けられている。学会大会のセッションも、基本的には RC を単位として開催され、家族、教育、歴史、社会階層、都市、理論など社会学の各トピックについて最新の研究成果が報告された。

国立社会保障・人口問題研究所からは吉田が参加し、以下の報告を行った。  
Yoshida, Wataru, "Trickle-Down Effect or Vice Versa? Examining the Effect of Female Managers in Japanese Firms, 2008-2016,"

それぞれのセッションでは、発表後にディスカッションの時間が設けられており、しばしばフロアと発表者の間で活発な議論が展開されていた。著者個人としても、同じセッションで報告していたオーストラリア国立大学の研究グループとセッション後に意見交換し、研究を進めるうえで重要な示唆を得られた。

今回の第21回大会は2027年に韓国・光州で開催予定である。(吉田 航 記)

## 韓国文化日報「文化将来報告」国際セミナー

韓国ソウルの大韓商工会議所国際会議場にて、2023年6月29日 (木) 14:00～18:20に、「文化将来報告 Munhwa Future Report」と題する国際セミナーが開催された。このセミナーは、韓国の日刊新聞社である文化日報社が主催する、グローバルかつ歴史的な課題について世界各国の専門家を招聘し開催しているもので、第6回に当たる今年の会議は、テーマを「人口-21世紀における国家興亡の鍵」とし、過去最低、世界でも最低水準である0.78という合計特殊出生率を記録した韓国が今後どのように成長し、年金、福祉、労働、教育、防衛といった各分野を切り盛りしていくのかビジョンを開くことを目的としたものである。

開会セッションでは、イ・ブンキュ (李丙圭) 文化日報会長の挨拶に始まり、ユン・ソンニョル (尹錫悦) 大統領のビデオメッセージの後、キム・ジンピョ (金振杓) 国会議長、ハン・ドクス (韓惠洙) 首相がそれぞれ会場で挨拶し、その後多くの政治家や企業関係者が紹介される形式で、韓国のメディアの在り方がよくわかるものであった。

第一部は国際的な人口動向について、ウォルフガング・ルッツ ウィーン大学教授が人口動向と教

育の関係、ジェイムズ・レイモ プリンストン大学教授が韓国超低出生力の特徴について、第二部は筆者が「人口転換点の革新的なアプローチの必要性」というタイトルで日本における人口動向と政策対応について、チョ・ヨンテ（曹永台）ソウル国立大学教授が韓国の人口動向、特に人口密度との関係について講演した。それぞれの部は、パネルディスカッションに続いたが、特に第二部では、イ・スンヨン韓国人口学会会長が、韓国の出生力水準は日本の半分程度であり、特に有配偶出生率の激しい低下は、母親になることの価値が正当に評価されていないことによるものだと力説した。時間切れで十分な議論はできなかったが、今後も日韓人口動向に関し継続的な対話が必要であろう。

（林 玲子 記）

## ドイツ連邦人口研究所（BiB）50周年記念国際会議

2023年7月3日（月）から6日（木）にかけて、ドイツ・ウィースバーデンにてドイツ連邦人口研究所の50周年、ドイツ統計局の75周年を記念する国際会議および式典が開催された。ドイツ連邦人口研究所（BiB: Bundesinstitut für Bevölkerungsforschung）は、1973年に内務省令により創設された、ドイツにおける人口動向の科学的研究と政策提言を目的とした政府内の人口研究機関である。今回の50周年記念会議は、「政策に関連する人口研究の最前線」と題し家族・結婚、国内・国際人口移動、死亡動向と長寿化の三分野に分かれ、3日間かけて報告・議論が行われた。筆者は死亡動向と長寿化のセッションで「日本の死因統計とICD-11時代の方向性」と題する報告を行った。マックスプランク人口研究所やフランス国立人口研究所（INED）などヨーロッパ内の多くの研究者が参加するとともに、ドイツの地方統計局の担当者等の参加もあり、活発な議論が行われ、有意義であった。

会場は、BiB 横の博物館、及びそこから1km程度離れたドイツ統計局にて行われ、徒歩で移動しながら街並みを楽しんだ。またドイツ統計局内には人と荷物を運ぶための扉のないエレベーターがあり、古い設備ではあるが現役で始終動いていた。

後半にはドイツ統計局の75周年式典が開催され、すべてドイツ語ではあったものの、基調講演はケースティン・ブルックヴェ（Kerstin Brückweh）ベルリン応用科学大学教授による第二次世界大戦後、特に東ドイツにおける統計制度の歴史に関わるもので、このような研究の厚みがあることも認識できた。

（林 玲子 記）